

〔北総文化研究センターから〕

北総文化研究センター主催「研究会」の経過報告（その6）

はじめに

前号では、第29回までの研究会について報告したので、今号では第30回以降の研究会について報告要旨を紹介する。

第30回 研究会

1. 日時 2006年1月26日(金) 教授会終了後
2. 場所 2号館2階会議室
3. テーマおよび報告者

テーマ「人間文化を形成するミッシェル・セール『生成』のノワーズ」

報告者 矢後 長純 教授

4. 報告要旨

人間文化形成のメカニズムは、われわれの脳のなかに隠されている。演者は、畏友福田信夫氏（故人）とともに長年、それを西田哲学の純粹経験とそこから発生するオートポイエーシスに求めてきた。

3年ほど前、ふとした機縁で本学の及川馥教授から、同教授の手になる訳書『生成一

概念をこえる試み』（法政大学出版局、1983年。原書は、Michel Serres: “Genèse”, Edition Grasset et Fasquell, Paris, 1982) を頂き、ミッシェル・セールの思想に触れた。及川教授の温なお人柄からの影響もさることながら、セールの思想を日本語で熟読できたことは、筆者らの研究に多大なる恩恵となった。セール思想の根幹をなすノワーズは、メタファーを生みながら純粹経験を多彩な方向へ導くと知ったからである。セールが「アフロディテは潮騒から生まれ、今でも生まれているかもしれない」としばしば云うように、ノワーズは人間文化を紡ぎだすものだった。

この講演は、現代フランス思想を代表する一人ミッシェル・セール (Michel Serres、パリ第一大学科学史教授、1930年生まれ) 初期の思想をノワーズ (noise) から探ったもので、及川教授ご退任の記念講演とさせて頂いたものである。

分子生物学における言語関連遺伝子としてのFOX P 2 遺伝子の発見 (G.F. Marcus & S.E. Fisher: Trends in Cognitive Sciences, Vol. 7, 257～262, 2003) および自閉症の少女ナディアに関するN. Humphreyの考察 (邦訳、

垂水雄二『喪失と獲得』（第7章）、紀伊国屋書店、2004年）などを併せ考えると、現生人類の脳のノワーズがほぼ完成したのは、今から3万年ほど前のことと推定される。ロゴスの世界が未熟だった当時、人々はメタファーによるコミュニケーションを用い、神話、伝説、寓話などを生み、語彙を増やし、文法を整備しながら人間文化の形成を開始したと考えられる。

その後もノワーズは活発な機能を持ち続け、芸術のほかにロゴスの世界を展開して科学を生んで現代に至っている。この講演では、純粹経験、ノワーズ、オートポイエーシス、現代科学技術における雑音の取り扱いなどを概観し、ノワーズが放出するメタファーによる文化形成の道程を辿った。

たとえば、日本文化における幽玄の発見は、1205年の新古今和歌集に見られる併進するメタファーにあったとし、また、“ノワズーな美女”とセールが云ったバルザックによるシュールレアリスムの発見について考察した。

最後に、詩人及川教授（詩集『鳥？その他』で2004年度茨城県文学賞を受賞）のメタファーを考察した。とくに最近作『夕映え』（2005年書肆山田刊）については、夕日のクオリアに端を発したメタファーが、さまざまに展開され、やがて暗い海の漁火に完結する。ここに連続する一群のメタファーには精妙な再帰性があり、新鮮かつ高度な芸術性を維持するうたごころが溢れている。

なお、この講演に続いて及川教授から、セールの略歴とその思想の系譜について数葉の資料を添えてのコメントがあったことを附記する。

第31回 研究会

1. 日時 2006年2月17日(金) 教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「学生相談室の活動報告」

報告者 柳生 崇志 講師

4. 報告要旨

前年度（平成17年度）の学生相談室活動に関して、相談室開催状況、スタッフ、利用人数、相談内容の分類などの概要が説明された後、本学の相談室利用状況を踏まえての今後の活動・対応方針と基本的援助活動についての説明が行われた。

また、学生相談室が抱える問題および改善策についても検討された。

5. 主要な質疑討論など

本学の学生相談室の活動および利用状況と他の大学等の一般的な学生相談室活動との異同についていくつかの質疑応答がなされた。また、来談する学生に対する具体的な援助活動（かわり技法）についての質疑応答が活発に行われた。

第32回 研究会

1. 日時 2006年5月19日(金) 教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「続・雑草考——草と農業（2）」

報告者 田中 学 教授

4. 報告要旨

前回の報告では、和辻哲郎の『風土—その人間学的考察』における「モンスーンアジアの稲作の特徴は、雑草との戦いである」という論述（反対にヨーロッパには「雑草」がない）を中心として、「雑草」の問題について述べた。

今回は、世間に広く膾炙した和辻の論述に対して、農学者の立場から「ヨーロッパにも雑草は存在する」という見解を主張した加用信文の論文「シェイクスピアと雑草」を、紹介しながら、ヨーロッパにも雑草は存在し、ただ除草方法がアジアの稲作と麦類を中心にしたヨーロッパの農業（農業技術）、とりわけ中世の代表的な三圃制農法の場合には、それが表面的には見えにくいこと、さらに菜園や庭園（ガーデニング）においては、加用がシェイクスピアのいくつかの作品から引用しているように、「雑草」と「除草」という概念がふるくから存在していたことを述べた。つづいて、「除草」を繰り返しても、なぜ「雑草」が、絶えないのか、という問題の前提として「地力」（fertility）という概念を検討した。これは、アジアでもヨーロッパでも古くから、経験的に存在した概念であり、また近代農学の出発点ともなったものであり、やがて土壌学、植物栄養学、肥料学などに分化・展開して行くものである。

シェイクスピアと「雑草」という結び付けをめぐって、多くの議論がなされた。

第33・34回 研究会

33回と34回は時間と報告内容の関係で、2回にわたって行われたので、一緒に要旨を報告する。

1. 日時 第33回 2006年7月21日（金）

教授会終了後

第34回 2006年9月15日（金）

教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「南総の西行伝承をめぐって北総の西行伝承に及ぶ—安房船形（館山市）西行寺を起点に一—」

報告者 宇津木 言行 助教授

4. 報告要旨

・第33回

本報告は国文学・民俗学研究者が共同研究を行う西行伝承研究会の成果の一つを踏まえ、千葉県南部の館山市船形に所在する西行寺（浄土宗）に伝わる西行伝承の考察を中心に行った。第33回研究会では西行寺文書の中から西行伝承を含む『起立書』『西行因縁記』の2点を取り上げて紹介した。元禄八年に記された『起立書』は、開基は恵心僧都（源信）、寺号は西行がここに草庵を結んだことによること等を記す西行寺の縁起書である。報告者の調査により、この文書は元禄八、九年に幕府が寺院統制の目的に沿って全国の浄土宗寺院から差し出させた由緒書の写しであることが解明され、西行寺の西行伝承は元禄八年以前に遡ることが確実になった。

民間の伝承を採録する『西行因縁記』は、西行とその妻とされる「呉葉の前」の悲劇を語り、特異な発展を遂げた西行伝承を伝える。内容を要約すると、西行が諸国修行の旅に出た後、残された妻「呉葉の前」は二子を失い、高僧の勧めにより美貌の顔を自ら傷つけ、諸国修行の旅に出る。安房の国船形の里に来て、この里に足を留め、仏道修行に励み、里人の

尊敬を受ける。ある日、里人に自らの素姓を語り、往生を遂げる。里人は遺言により、「呉葉の前」を埋めた塚に印の柳の木を植える。その塚の前で里人が大念仏の修行の最中に西行が立ち寄り、里人の話により事情を知る。西行は「呉葉の前」の菩提のために寺を建立し、西行寺と号したという。今は柳塚も、西行が読経のとき腰かけたという腰懸石も所在不明になっている。

・第34回

前回報告を受けて、柳塚という伝承形成の場と伝承の担い手についての考察を行った。柳田國男は早く西行伝説に触れて、伝承形成については峠や橋など境界的な場と遍歴する担い手の存在を示唆したが、その視点は西行寺の場合も有効である。地名起源になった柳塚の所在は不明に帰したが、文書や村絵図の検討から、字「柳塚」の中央部に、古く現在地に移転する前の西行寺旧地があり、元禄八年時点では西行寺の墓地だったその区域の近辺に推定地を求められることが判明した。その区域の一隅には西行寺所有の岩船地藏が現存する。地藏も境界の徴標の一つになるが、西行寺の寺域を離れた路傍の境界的な場所に当地の柳塚と腰懸石も存在し、そこが伝承形成の場となったことがわかった。

岩船地藏の台座に「諸国伝来念仏講」とあり、『西行因縁記』の「大念仏」（融通念仏）との関連を窺える。また付近の民家には呉葉の前の墓と称する石造物が伝来し（現存せず）、それと共に観音像を刻んだ墓標らしきものが伝存していることが調査により発見された。その記銘に「禅定門」とあり、融通念仏宗・禅宗で信徒の男子に与えられる戒名だから、これも「大念仏」との関連を窺わせる。

従って伝承の担い手として、時衆系の遊行聖などが想定され、船形港を通じた江戸湾海上交通を媒介とする、相模の藤沢・遊行寺との接点、説話伝承の流通経路なども視野に入ってくる。海を介在させた文化の形成・伝播を考える必要があるであろう。ほかに近隣の那古寺の観音堂の裏山にある和泉式部・小式部親娘の墓に関連して、旅する尼の説話伝承への関与も考えてみなければならない。地域全体の文化的状況への目配りも要請される。

伝承形成の解明には、伝承地の地域に即して関連する文物の掘り起しが必要なことは当然だが、広く全国的視野に立つての比較考察も必須である。本報告では最後に北総にも東金市・佐倉市などに注意すべき西行伝承が散在することを紹介した。

5. 主要な質疑討論など

能因法師の旅を先蹤として西行が行った奥州の旅と西行伝承の形成にはかかわりがあるのかどうかという質問があった。これに対し、奥州の旅の行路上の地に多く伝承が形成されたのはもちろんながら、行路から外れた西行が訪れていないはずの地域にも多くの伝承が発生しており、南総・北総の場合は未訪の地に形成された事例になるであろうと回答した。その人物が来ていない土地に伝説が形成されるのは興味深いという意見も出された。伝承形成の時期は何世紀ごろになるのかという質問に対しては、西行伝説の形成はその没後まもなく始まり、中世から近世にかけての長い期間にわたっているため、いつごろと特定するのは難しい旨を回答した。弘法大師伝説との重なりや交替など長い歴史の変容の過程や、中世の連歌師・聖・修験などの活動を視野に入れて考えてみなければならない問題

でもあることなどを補足した。また近代人がとかく忘れがちであった海への視点から伝承文化の形成・伝播を再考する必要性の提案は大変面白いという意見が寄せられた。

第35回 研究会

1. 日時 2007年1月19日(金) 教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「農業におけるIT利用に関する研究」

報告者 中村 典裕 教授

4. 報告要旨

配布された資料と、パワーポイントによるスライドによって報告とプレゼンテーションがなされた。

農業分野は食の安全と環境に直接結びつく分野であるため、特に生産者と消費者のコミュニケーションが重視されており、そういった場面で情報技術（IT）の果たす役割が大きい事が、報告の要点であった。

その他にも、農業者の居住地域や年齢層によって、情報格差（デジタル・ディバイド）が生じていることや、食の安心・安全を保証するための認証制度（GAP：適正農業規範）の導入などについての紹介があった。

また、最後に報告者が取り組んでいる「ネットワーク接続型カメラによる画像の蓄積と気象データ自動読み取りシステム」の研究についての報告も行われた。

5. 主要な質疑討論など

食品の安全や安心に関しては非常に関心が高く、日本農業と輸入農産物の違い、農産物

直売所とスーパーマーケットの違いなどの議論がなされた。前者は、例えば農薬の使用基準や残留性について、作物ごと、国ごとに違いがあつて、一つの尺度だけで安全とははかれないことなどが紹介された。また、直売所では安心して農産物が購入できる一方で、品揃えや価格の不均一などの供給の安定性に問題があることが指摘された。

また、画像システムに関しては、農家レベルでの導入の可能性や、そのシステム価格に関して、活発な議論が行われた。